

復活の確信

「だから私はここに立って、小さき者にも大いなる者にも証しする。私は、預言者たちやモーセが言ったこと、すなわち、メシアが苦しみを受け、死者の中から最初によみがえり、自分の民と異邦人と共に光のメッセージをもたらすということ以上のことは何も言っていない。」
使徒26:22,23

復活の保証は、聖書における非常に重要なテーマのひとつであり、そうでなければ神の約束は意味をなさない。しかし、なぜ死者の復活が必要なのかを理解するには、まず死の本質を十分に見極める必要がある。聖書は、死とは忘却-非存在の状態であると教えている。(伝道の書9:5,6,10)。完全な人アダムが罪を犯したとき、彼は罪の罰である死を負った。(創世記2:17、ローマ5:12、6:23)。その死の状態を神はこう表現した：「あなたがたは土から取られたのである。あなたがたは塵であり、塵に帰るのである」(創世記3：19)。(あなたがたは塵であり、塵に帰るからである」(創世記3:19)。死後の世界

や、死に左右されない「魂」についての言及はなかった。

イエスの生と死と復活によって表現された神の愛と憐れみを除いては、アダムは永遠に存在しない運命にあった。イエスの復活は、すべての人のための復活という神の計画が現実になることを保証するものだった。使徒パウロは火星の丘での説教の中で、「神は、ご自分が定めたその人によって、世を正しく裁かれる日を定められた。使徒17:31

イエスの復活の必要性

イエスがアダムの身代金として死ぬことは、神の計画において極めて重要であったが、イエスが死の状態から復活することも同様に必要であった。死んだキリスト、すなわちメシヤは、イザヤ書9:6,7にあるような、神のみことばの素晴らしい約束を果たすことができない。その統治と平和の増大は尽きることがない。"弟子たちは、この約束が主の地上での働きの時に成就すると期待していた。だから、イエスが十字架で死なれた時、彼らは落胆し、落胆したのだ。彼らは、これが天の父の計画の一部であることを理解していなかった。

イエスが十字架につけられてから3日目の週の初めの日、イエスはエマオに向かう途中の意気消沈した二人の弟子に現れた（ルカ24:1,21）。彼らはイエスを見知らぬ人だと思った。二人が会話を交わすと、主のご計画のこの重要な部分を見抜けなかった二人を、彼は穏やかに叱責して言った：「ああ、愚かな者たちよ。預言者たちが語ったことをすべて信じる心の遅い者たちよ：預言者たちが語ったことをすべて信じる愚かな者たちよ。キリストは、これらの苦しみを受け、栄光のうちに入られるはずではなかったのか。そして、モーセとすべての預言者たちから始めて、すべての聖句によって、ご自分に関することを説き明かされた」（ルカ24：25-27）。（ルカ24:25-27）。その後の40日間で、弟子たちはイエスが死からよみがえったという事実を受け入れ、信じるようになったが、神の和解の計画における復活の重要性を彼らが完全に理解したのは、ペンテコステの後、
、聖霊が彼らの上に臨んでからであった。これは、使徒言行録2:14-36に記録されているペテロの説教によって示された。

復活という言葉は旧約聖書には出てこないが、この教理は聖書の多くの明白な記述によって教えられている。ヨブ記14:13-15にはこうある：「あなたの怒りが過ぎ去るまで、わたしを墓の中に隠し、わたし

を秘密にし、わたしに定められた時を定め、わたしを覚えていてくださいますように！...あなたが呼べば、わたしは答える。預言者イザヤはこう書いている。"あなたがたの死人は生き、私の死体とともに起き上がる。あなたがたの露は草の露のようであり、地は死者を追い出す"（イザヤ**26:19**）。（イザヤ**26:19**）。預言者ホセアはこう書いている。「わたしは彼らを墓の力から身代金とし、死から贖い出す：死よ、わたしはあなたの災いとなり、墓よ、わたしはあなたの滅びとなる。"ホセア**13:14**

アブラハムへの約束

復活の絶対的な確実性は、神の約束が 意味を持つために復活を必要とするある出来事において、私たちに示された。創世記**22:15-18**に記されている、アブラハムに対する神の約束のことである。神はアブラハムに、サラとの間に男の子をもうけることを約束されていた（創世記**17:19**）。アブラハムはこの約束が成就するのを何年も待っていた。しかし、イサクがまだ若かった頃、神はアブラハムに息子を焼き尽くす供え物として捧げるように言われた（創世記**22:1,2**）。（創世記**22:1,2**）。アブラハムの神の約束に対する信仰は、その約束を果たすために必要で

あれば、神がイサクを死から復活させると信じるほどであった。

この確信は、アブラハムが山のふもとに残された若者たちに言った言葉に示されている。(5節)。使徒パウロはヘブル11:17-19でこの考えを裏付けている：「約束を受けていたアブラハムは、そのひとり子をささげた：神はイサクを死者の中からもよみがえらせることがおできになったのである。この絵の中で、神はアブラハムの中に、イエスはイサクの中に表されていることに注目しよう。世に対する神の約束はすべて、イエスが中心であった。イエスを死者の中から復活させ、これらの約束を実行するためには、イエスが生きることが必要だった。

サドカイ派は復活を信じていなかった。彼らは、一人の女性を七人の亡くなった夫の妻にするというとてもない状況をでっち上げて、イエスを罠にはめようとした。王国で、彼女は誰の妻になるのか？イエスは答えられた、「あなたがたは間違っている。復活の時には、結婚もせず、婚姻もしない。(マタイ22:23-30)。イエスは、御国では結婚がないので、サドカイ派が作り出した状況には何の意味もないと指摘したのである。しかし、イエスは、サドカイ派の教義の誤りを指摘する機会を見て、こう言われ

た。神は死者の神ではなく、生きている者の神である。

サドカイ派は、家長たちが何世紀も前に死んでいたことを知っていたし、イエスがそのことを知っていたことも知っていた。神が真実で信頼できる方であるならば、アブラハム、イサク、ヤコブが再び神との約束された関係を楽しむためには、生き返らせなければならぬことを認めざるを得なかったのである。

モーセのような預言者

申命記18:18,19でモーセは、新しい仲介者と新しい契約の取り決めの下で機能する王国に関する神の言葉を繰り返した。「わたしは彼らの同胞の中から、あなたのような預言者を起こし、わたしの言葉をその口に含ませる。そして、その預言者がわたしの名によって語るわたしの言葉に聞き従わない者には、わたしはその者からそれを要求する」。

使徒ペテロは使徒言行録3:21-26で、モーセによるこの預言を王国に当てはめ、それを「万物が回復する時」と呼び、この素晴らしい時は、世が始まって以来、神がすべての聖なる預言者の口を通して語られたと述べている。そして、モーセによって語られ

た最初の預言（ ）を聴衆に思い出させた。ペテロのこの素晴らしい説教は、神殿のポーチの一つで行われた。聴衆の中には、神殿の長とサドカイ派の人々もいた。ペテロが説教の最後に、「神はまず、御子イエスをよみがえらせ、あなたがたを祝福するために遣わされたのです。彼らが怒ったのは、ペテロが、イエスは死者の中からよみがえられたのであり、イエスによって、墓の中にいるすべての人がよみがえり、"回復の時"の恩恵を受けるのだと主張したからである。記録はこう続く：「彼らが民衆に話していると、祭司たち、神殿の長、サドカイ派の人々が彼らに向かって来て、彼らが民衆に教え、イエスによって死者の復活を宣べ伝えていることを悲しんだ。使徒言行録4:1,2

律法契約の預言的特徴

聖書には、イスラエル民族に与えられた律法契約の多くの特徴が、将来の出来事を予言していたことが記されている。(1コリント10:11；ヘブル10:1)。
これは特に、律法の一部であるレビ記の第23章に当てはまる。この章で主はモーセに、国民が守るべき祭日について、 。第一の月の十四日に過越の小羊をささげ、十五日には七日間続く種入れぬパンの祭りを祝うことになっていた。(出エジプト記12:6；

レビ記23:5,6)。イスラエル人は「第一の月の十五日、過越の祭りの後の朝に」エジプトを出発した。(民数記33:3)。彼らが自分たちの土地に入り、穀物を収穫した後、主はモーセに追加の儀式を行うよう指示された。私たちはこう読んだ：「わたしがあなたがたに与える土地に入り、その収穫を刈り入れたら、その収穫の初穂の束を祭司のところに持って来なさい：祭司はその初穂を主の前で振り、あなたがたのために受け入れる。(レビ記23:10,11)。ここで言及されている「安息日」とは、種入れぬパンの祭りの初日を示す聖なる祭儀のことである。

儀式の一環として、祭司は畑に出て、熟した穀物を選び、束にして束にする。祭司は戻って来て、祭壇の前で、収穫の最初の果実の捧げ物として、その束を主の前で振った。この行為、50日間続く穀物の収穫の始まりを告げた。15,16節

この祝日の特徴は、イエスの場合、驚くほど予言的であった。イエスには、律法の詳細を完璧に守る義務があった。ニサンの14日は日没から始まり、真夜中過ぎにイエスはゲッセマネの園で逮捕され、カイアファに引き渡され、その後ローマ人に引き渡された(マタイ26:47-75; 27:1-26)。(マタイ26:47-75、27:1-26)。マルコの記述によれば、イエスは三時間目、まだニサンの14日午前9時頃に十字架につけ

られた。イエスは九時間目、午後三時頃まで十字架につけられ、死なれた。(マルコ15:25-37)。このように、イエスは、イスラエルの過越の子羊が殺されたのと同じ日、ユダヤ教の計算ではニサンの14日に死なれたのである。パウロは、この関係を確認してこう言う。"私たちの過越の小羊であるキリストは、私たちのために犠牲となりました。"1コリント5:7

イエスの遺体は、ニサンの14日の日没前に墓に納められた。(ルカ23:53-55)。その遺体は、翌日の日没から日没まで、つまりニサンの15日の安息日まで、ずっと墓所に安置されていた。(56節)。そして、週の初めの日、すなわちニサンの16日の朝早く、女たちが墓所に来て、イエスが死者の中からよみがえられたことを知った。(ルカ24:1-6、マルコ16:1-6)。こうしてイエスは霊的収穫の"初穂"となり、死によって"眠っていた者たちの初穂"、すなわち復活の初穂となった。(第1コリント15:20)。私たちは、ユダヤ人の祭司がニサンの16日の朝早く、主の前で羊の束を振る儀式を成就したのと同時に、イエスが死者の中から復活して律法を成就したと考えるかもしれない。

パウロの詳細な証言

使徒パウロの時代にも、私たちの時代と同じように、死者の復活に関する懐疑論があった。これに対処するために、パウロは、約束された復活が神の救いの計画の本質的で不可欠な部分であることを示すために、第一コリント**15章**を書いた。この章の冒頭でパウロは、コリントの教会に宣言したメッセージが福音（ギリシャ語：良いメッセージ）であり、そのメッセージの第一の部分はイエスの死と復活であることを思い出している。「キリストが私たちの罪のために死なれたこと、葬られたこと、そして、
聖書に従って三日目によみがえられたことです。」
第一コリント**15:3,4**

使徒は次に、イエスが使徒たちによって目撃され、さらに**500人以上**の兄弟たち（パウロが執筆した時点ではまだ生きていた兄弟たちの方が多かった）によっても目撃されたことから、イエスの復活を事実として示している。最後に、パウロ自身がダマスコへの道で復活の主を見た。**(5-8節)**。**12-19節**で、パウロは、復活の教理全体がイエスの復活にかかっており、イエスがよみがえられたので、墓の中にいるすべての人も死者の中からよみがえることを示す。もしイエスがよみがえらなかったら、弟子たちや

従者たちでさえも、まだ罪の中にいたことになる。イエスが死んでアダムの身代わりになっても、神の前に現れて身代金の価値、すなわち功德を神の正義の手に差し出すためには、イエスが再び生きることが必要だったからである。

使徒はこの部分をこう結んでいる：「しかし今、キリストは死者の中からよみがえり、眠っていた者たちの初穂となられた。人〔アダム〕によって死が来たのですから、人〔イエス〕によって死者の復活も来たのです。アダムにあってすべての者が死んだように、キリストにあってすべての者が生かされるのです」、つまり、すべての、従順によって永遠の命を得る機会が与えられるのである。(20-22節)。

パウロはこう続ける：「各自がふさわしい順序に従って、初穂であるキリストと、その後にキリストの前にいるキリストである人々とが復活する。(23節) キリストとは油注がれた者という意味で、使徒は、油注がれたイエスの足跡をたどる者たちが最初に復活すると言っているのだ。彼らは王や祭司として王国でイエスと関わるのだから、これは論理的で理にかなっている。(マタイ19:28,29；黙示録20:6)

。それから、王国の臣民たち、つまり墓の中にいるすべての人々が、いのちを得る機会を得るために、墓から出てくるのである。ヨハネ5:28,29

肉なる体と霊なる体

しかし、ある人は言うであろう、死人はどのようにしてよみがえり、どのようなからだをもって来るのか、と。...あなたがたの蒔く種は、その肉体を蒔くのではなく、裸の穀物を蒔くのである：しかし、神は御心に適うように、それに肉体を与える。しかし、神は御自分の御心に適うようにその体をお与えになり、すべての種に御自分の体をお与えになる。しかし、天の栄光は一つであり、地の栄光は別である。太陽の栄光もあれば、月の栄光もあり、星の栄光もある。死者の復活もまた同じである。それは腐敗のうちに蒔かれ、腐敗のうちによみがえる：汚れのうちに蒔かれ、栄光のうちによみがえり、弱さのうちに蒔かれ、力のうちによみがえる。自然の体があり、霊の体がある。"第1コリント15:35-44

使徒パウロのこの言葉には、いくつかの例示が使われているが、そのどれもが、復活の時には肉体を持つ者と霊体を持つ者というように、複数の種類の肉体が存在するという事実を指摘している。一人一人がどのような肉体を持つかは、死に際して蒔かれたものによって決まる。使徒が38節で語っている「それ」とは、個人が現世で成長する人格や性格のことである。人類の大半は、この地上での生活に最も適

した性格を持つ。したがって、彼らは肉体を持つことになる。王国では、地上は栄光に満ちた生活の場となり、地上で永遠の命を得た者は、神の恩恵と祝福を永遠に賛美することになる。

しかし、ペンテコステ以来の現代において、イエスの血潮によって可能となった、より高い命の備えを知った者もいる。イエスの足跡をたどるようにとの呼びかけに応え、地上のものから心を変え、霊のものに心移すよう招かれている。(ローマ12:1,2、コロサイ3:1-3)。このような人々は、クリスチャンとして歩む過程で、神の御言葉を学ぶことによって心を変えていく。その原則を生活の中で適用し、霊的な心を養うのである。

使徒は、霊の体に復活した者は不死が与えられると述べて、復活の説明を締めくくっている。「朽ちる者は朽ちないものを着なければならず、死ぬ者は不死を着なければならない。そうして、朽ちるべき者が朽ちないものを身に着け、死ぬべき者が不死を身に着けるとき、死は勝利に飲み込まれる、と書いてあることが実現するのです。"(第1コリント15:53,54)。パウロが一部引用したイザヤ書25:6-10の預言()が実現するということである。これは、人類が復活して土のちりから戻されるときに、

王国と祝福がもたらされることを預言したものである。

「主（神）は勝利のうちに死を飲み込まれ、主なる神はすべての顔から涙をぬぐい去られる。主がそれを語られたからである。そしてその日、こう言われるであろう、"ああ、この方こそ私たちの神である。(イザヤ25:8,9)。預言者たちによって、イエスによって、そして忠実な使徒たちによって語られた復活の確かさを喜ぼう。この理解について、神を賛美しよう！

10月5日のレッスン

脅かされる神の預言者

キー・ヴァース"それゆえ、今、あなたがたの道と
行いを改め、あなたがたの神、主の御声に従いなさい。
"そうすれば、主はあなたがたに告げられた悪
を悔い改めてくださる。

エレミヤ26:13

選ばれた聖句

エレミヤ1:6-10; 26:8-15

権力に真実を語る」という言葉は、20世紀半ばの公民権運動や反戦運動で脚光を浴びた。しかし、「権力に真実を語る」という概念は、たとえそれが困難なことであっても、また危険を伴うことであっても、権力に対して発言することを奨励するものであり、何千年も前から存在している。この概念は聖書にも登場し、イエスを死刑に処する権限を持つポンテオ・ピラトに対するイエスの返答ほど力強いものはないだろう。ピラトがイエスに "あなたはユダヤ人の王なのか?"と尋ねると、イエスはこう答えた。

もし、わたしの国がこの世のものであったなら、わたしのしもべたちは、わたしがユダヤ人に引き渡されないように戦ったであろう。ピラトは彼に言った、「それでは、あなたは王なのか」。イエスは答えられた。わたしが世に生まれたのは、このためであり、真理をあかしするためである」。ヨハネ

18:33,36,37

今日のレッスンでは、預言者エレミヤの生涯に見られる「権力に真実を語る」もう一つの例を取り上げる。若くして預言者として召されたエレミヤは、青年と呼ばれたにもかかわらず、ユダの人々に本当に預言することをエホバに保証された。わたしがあなたを遣わす者のところへ行き、わたしが命じることを何でも話しなさい。見よ、わたしは、わたしの言葉をあなたの口に置いた。"見よ、わたしは今日、あなたを国々の上、王国の上に置き、抜き取り、打ち壊し、滅ぼし、打ち倒し、建て、植える者とした。エレミヤ**1:7,9,10**

聖書全体を通して、イスラエルがエホバによって遣わされた預言者を拒絶し、場合によっては殺すというパターンが見られる。悔い改めを求めるメッセージ、神の裁きの警告、偽善の暴露、偽りの正義、民衆の信念や行動との矛盾は、民衆がエホバの選んだ使者を脅すのに十分な挑発だった。

エレミヤがエルサレムの町とイスラエルの神殿に対して預言したとき、「祭司と預言者たちは、諸侯とすべての民に向かって言った。エレミヤは答えた。しかし、もしわたしを死刑にするなら、あなたがたは必ず罪のない血を自分たちの上にも、この町の上にも流すことになる。それにもかかわらず、シャファンの子アヒカムはエレミヤを支持したので、彼は死刑に処せられるために人々に引き渡されることはなかった」。エレミヤ**26:11,14,15,24**

エレミヤの「権力に真実を語る」という使命の模範が、私たち一人一人にとって、人気がないと思われるときでも自信を持って福音を宣べ伝える励ましとなりますように。私たちのメッセージは、イエスが個人的に伝えてくださったものです：「だから行って、あらゆる国の人々を弟子とし、父と子と聖霊の名によってバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じたことをすべて守るように教えなさい：わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる。"マタイ**28:19,20**

国の悪

キー・ヴァース「わたしの声に従いなさい。そうすれば、わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。わたしがあなたがたに命じたすべての道を歩みなさい。」

エレミヤ7:23

選ばれた聖句

エレミヤ7:1-11, 21-23

キー・ヴァースにある命令は、出エジプト記19:5、レビ記26:3-12、申命記5:33にある命令を簡潔に言い直したものである。もしイスラエルがエホバの戒めを守るなら、彼らは与えられた土地に住み、栄えるだろう。これは、イスラエルが北イスラエル部族と南ユダ部族に分かれた後も同じだった。神とその選ばれた民との間の契約では、従順が常に最も重要な条件であり、犠牲ではなかった。再び偽りの神々への礼拝に陥ったユダの民は、**、**神殿に来ていけにえを捧げることによって、エホバの裁きからの安全を求めた。

今日の選択聖句では、エレミヤの口を通して語られたエホバの言葉を読むことができる：「主を礼拝するためにこの門を通して来るユダのすべての民よ、主の言葉を聞け。イスラエルの神、全能の主はこう仰せられる：あなたがたの道と行いを改めなさい。欺く言葉を信じて、ここが主の神殿、主の神殿、主の神殿と言ってはならない！もしあなたがたが、本当に自分の道と行いを改め、互いを正當に扱い、この場所で、外国人、父のない者、やもめを虐げず、罪のない血を流さず、他の神々に従って自分たちに害を及ぼさないなら、わたしはあなたがたをこの場所、わたしがあなたがたの先祖に与えた土地に、とこしえに住まわせる。しかし、見なさい、あなたたちは価値のない偽りの言葉を信じている。盗みをし、殺人をし、姦淫をし、偽証をし、バアルに香をたき、あなたの知らない他の神々に従いながら、私の名を冠したこの家に来て、私の前に立ち、私たちは安全だ、これらの憎むべきことをしても安全だと言うのか。私の名前（ ）を冠したこの家は、あなたたちにとって強盗の巢窟となったのか？しかし、わたしは見ていた！主は宣言される」。エレミヤ7:2-11

この力強い言葉は、ユダがその悪い行いを改めなければ、宗教的な行事も神殿の犠牲も利益をもたらさ

ないことを示している。既知の罪を犯し、認識された義務を怠って生活している間は、誰も無償の救いへの関心を主張することはできなかった。これが、エレミヤが訴えたユダ王国の悪であった。彼らは、"これは主の神殿だ！"と宣言することによって、自分たちが冒涇した神殿が自分たちの保護になると考えていた。

神の御言葉に従わずに神の寵愛を主張することに対するこの警告は、エレミヤの時代と同様、今日にも当てはまる。毎週**6**日間も不従順な生活を送りながら、安息日に教会の建物で救いを主張し、キリストがそこに救いに来てくださると主張することはできない。「恵みが豊かになるために、罪を犯し続けなければならないのか。パウロは言った。(ローマ**6:1,2**)。キリストの十字架は、従順であろうとする誠実な努力とともに、このような有害な感情に対する最も効果的な救済策を形成する。神の御子は、神の律法の素晴らしさと罪の悪さを示すために、私たちの罪のために御自身を捧げられたのです」(ローマ**7:13**)。ローマ**7:13**)、私たちは、結果なしに悪いことをしてもよいなどとは決して考えないようにしよう。

約束された新しい契約

キー・ヴァース「主は言われる、"わたしはその日以後、わたしの律法を彼らの内側に置き、彼らの心に記す。

エレミヤ31:33

選ばれた聖句

エレミヤ31:27-34

エジプトの束縛から解放された後、神はイスラエルがその御声に従い、契約を守るなら、「すべての民の上に立つ特別な宝」「祭司の王国、聖なる国民」となると約束された（出エジプト記19:5,6）。この言葉を聞いて、「民は皆、共に答えて言った。モーセは民の言葉を主に返した」。

契約の遵守を約束したにもかかわらず、イスラエルの民は繰り返し誓いを破った。彼らの不従順の結果、エレミヤはイスラエルとユダの両家に対して、将来確立される新しい契約について語った（エレミヤ31:31）。（エレミヤ31:31）。この契約は最初の契約よりも優れたものであり、神はそれを石板の

代わりに彼らの心に書かれる。使徒パウロは、最初の契約である "律法" の目的は救いを与えることではなく、イエス・キリストへの信仰によって得られる究極的な救いへと人々を導くための一時的な手段であったと説明している。

「では、律法は神の約束に反しているのだろうか？そうではありません！もし、いのちを与える律法が与えられていたなら、義は確かに律法による。しかし、聖書は、イエス・キリストを信じる信仰による約束が信じる者に与えられるように、すべてを罪の下に閉じ込めたのです。信仰が来る前、私たちは律法の下に捕らわれ、来るべき信仰が啓示されるまで監禁されていた。ですから、キリストが来られるまでは、信仰によって義とされるために、律法が私たちの後見人となっていたのです」。ガラテヤ**3:21-24**

エレミヤが預言したこの新しい契約は、不従順による神とイスラエルとの間の疎遠を和解させる仲介者を必要とする。モーセは最初の契約の仲介者であったが、神（ ）はその独り子イエスを、この新しい、より良い契約の仲介者として備えてくださった。

（申命記**18:15-19**；使徒**3:22,23**；1テモテ**2:5**）。新しい契約はまずイスラエルと結ばれるが、やがてキリストの千年王国の間に全人類を含むようになる。

(黙示録22:17; 20:6)。そのためには、新約のいのちの提供を受ける一人ひとりの従順が必要となる。

メシヤ王国のすべての人々を祝福するために、神はキリストの花嫁となる民を召し出される。「あなたがたが救われたのは恵みによるのです。それは、来るべき時代に、キリスト・イエスにある私たちに対する御親切によって表される、その恵みの比類のない豊かさを示すためです。"(エペソ2:5-7)。教会階級の発展は、新約のもとでは仲介者の助けによって行われるのではない。むしろ、使徒ヨハネは、"私たちには、義人イエス・キリストという、父との弁護者（仲介者ではなく、慰め主、助け主）がいます"と教えている。第1ヨハネ2:1

私たちは、新約を通して全人類を天の父（ ）との調和に戻すという希望に忠実でありましょう。黙示録21:1-5

予告された回復

**キー・ヴァース"山の町々、荒れ地の町々、南の町々、ベニヤミンの地、エルサレム周辺の地、ユダの町々では、群れは再び、告げ知らせる者の手の下を通る、と主は言われる。"
エレミヤ33:13**

**聖句の抜粋
エレミヤ33:1-13**

今日のキー・ヴァースは、エホバが選ばれた民であるイスラエルとエホバの関係について述べている。イスラエルは、神の配慮と祝福と引き換えに、律法と定め契約の下で従順であり続けることを誓った。羊飼いが自分の群れを世話するように、彼らは神に世話されていたのだ。ダビデはこう書いている。主は私に必要なものをすべて与えてくださる。(詩篇23:1)。預言者イザヤは、創造主とその選ばれた民との間のこれと同じ関係を宣言している：「主は羊飼いのように群れの世話をされる。羊飼いのように群れの世話をする。羊飼いは子羊を腕の中に集め

、 。羊飼いは、子羊をその腕に集め、子羊を心に抱く。イザヤ**40:11**

イスラエルの問題は、しばしば神によって任命された自己中心的な羊飼いから生じていた：「私が生きている限り、主権者である主は言われる、あなたは私の群れを捨て、あらゆる野生動物に襲われるままにした。あなたたちは私の羊飼いでありながら、私の羊が迷ったとき、捜さなかった。あなたがたは自分たちの世話をし、羊を飢え死にさせた。"エゼキエル**34:8**

しかし、イスラエルのすべての羊飼いがエホバからの指示を無視したわけではない。多くの預言者たちは、神がいつか羊飼いを遣わし、その羊飼いがすべての国々の中でイスラエルの地位を再び確立することを人々に忠実に告げた。「そのとき、わたしは彼らの上にひとりの羊飼いを任命し、その羊飼いが彼らを養う。エゼキエル**34:23**

神の使いに注意を払っていた忠実なイスラエル人は、ダビデが来るべきメシアを予表することを知っていた。イエスの母マリアは、天使が彼女の前に現れ、彼女が特別な子を産むという知らせを受けたとき、すぐに理解した：「あなたは男の子を身ごもり、産む。その子は偉大な者となり、いと高き方の御子

() と呼ばれるでしょう。主なる神は、彼に父ダビデの王座をお与えになる。"ルカ1:31,32

キー・ヴァースの "tells "という単語は、数を数えるという意味である。エレミヤのメッセージは、イスラエルは大きな罪を犯したが、再びエホバの羊として数えられるようになるということだ。パウロは、福音は "まずユダヤ人に、またギリシア人（異邦人）に "と言っている。(ローマ1:16) 。この聖句は、使徒13 : 46やローマ11 : 25,26などの他の聖句とともに、神の救いの計画にはユダヤ人が優先されるという事実を強調している。しかし、彼らはヨハネによる福音書10章でイエスが語った羊ではなかった。

イエスは、自分がメシアであるかどうかという彼らの質問に答えて、こう言われた。わたしが父の名によって行うわざが、わたしを証ししている。わたしの羊はわたしの声に聞き従う。わたしは彼らに永遠の命を与え、決して滅びることはない。 彼らをわたしにお与えになったわたしの父は、すべての者よりも偉大であり、だれも彼らをわたしの父の手から奪い取ることはできない。"ヨハネ10:24-29

ギデオン、エフタ、サムソン

"主が彼らを士師として起こされたとき、主は士師と共におられ、士師の日の間中、彼らを敵の手から救い出された。"
士師記2:18

ヨシュアの死後数世紀の間、イスラエルには明確な政府の取り決めがなかった。この間、誰もが "自分の目に正しいと思われること "を行ったという記録がある。(民数記33:52-56、士師記21:25)。ほとんどの場合、その傾向は不義に向かい、偽りの神々を崇拝していた。彼らの悪しき道に対する罰として、神はイスラエルの民が、命じられたようにカナンの地から完全に追い出されなかった敵によって圧迫されることを許された。(士師記2:13-15)。「それにもかかわらず、主はさばきつかさたちを起こし、彼らを略奪する者たちの手から救い出された。(16節)」。この記事では、3人の忠実な士師-ギデオン、エフタ、サムソンの生涯を検証する。

ギデオンはイスラエルの5番目の士師である。彼は、7年間イスラエルを圧迫していたミディアン人から隠すために、「ぶどうの木のそばで麦を」脱穀しているときに、天使の訪問を受けます。天使はギデオンに言った、"主はあなたと共におられる。(士師記6:11,12)。天使に対するギデオンの返事は、あまり熱心なものではなかった。この状況下で、主が彼とともに、いや、実際、イスラエルの民の誰とともにおられると言えるのか、彼には理解しがたかった。主が私たちとともにおられるのなら、なぜこのようなことが起こったのでしょうか。また、私たちの先祖たちが『主は私たちをエジプトから引き上げてくださったのではないか』と語った主の奇跡は、いったいどこにあるのでしょうか。

この返事は、必ずしもギデオンが天使の主張を疑っていたことを示すものではなく、おそらく、さらなる情報を得るための彼の方法だったのだろう。ギデオンは、神が過去に民を救い出すために奇跡を行われたのであれば、再び奇跡を行うことができるはずであり、このこと（ ）を確信したかったのである。主は御使いを通してギデオンに答えられた：「あなたの力で行きなさい。そうすれば、イスラエルをミディアン人の手から救うことができる。見よ、私

の一族はマナセで貧しく、私は父の家で最も小さい者だ」。

ここでギデオンは、主がその奉仕のために用いられたすべての者が持っていた特徴的な謙遜さを示している。彼の家族は貧しく、明らかに、ギデオンは自分が家族の中で重要でないと感じられるような状況であったため、主が彼を民の解放者として選ばれたとき、彼は驚き、ためらった。神はこの謙虚な男を安心させ、こう言われた。"必ずわたしがあなたと共にいるので、あなたは一人の男としてミディアン人を打ち負かすであろう。(士師記6:16)。わたしは必ずあなたと共にいる」と主が保証されたとき、どんなに謙遜で弱い人間でも、主を信じることができれば、勇敢で勇気のある者となる。彼は主を疑わなかったが、自分と交信しておられるのがイスラエルの神であることを確かめたかったので、再び答えた。

そこでギデオンは主の使いに、「わたしがあなたのもとに来て、わたしの贈り物を携えてきて、あなたの前に置くまで」立ち去らないように頼んだ。使いは残ることを約束した。「ギデオンは中に入り、子ヤギー頭（若いヤギ）と、粉一エファの種入れをしていない餅を用意し、その肉をかごに入れ、煮汁を

鍋に入れて、櫂の木の下から主のもとに運び出し、それを献げた。(18,19節)。それから神の使いはギデオンに言った、「肉と種を入れない餅を取って、この岩の上に置き、煮汁を注げ」。彼はそのとおりにした。すると、主の使いは手に持っていた杖の先を出して、肉と種入れのない餅に触れた。それから、主の使いは彼の目の前から去って行った」。

主の使いは人間の姿でギデオンに現れた。奇跡的な神の力の現われと、天の使いの突然の消失によって、ギデオンは自分が誰と話していたのかを悟った。主なる神よ、私は主の御使いを顔と顔を合わせて見たのです。そして主は彼に言われた、『平安あれ、恐れるな。』

バアル礼拝の破壊

主の祝福が彼とともにあることを確信したギデオンは、イスラエルの民をミディアン人から解放する任務を進める準備が整った。そのために必要な準備が、この地のバアル礼拝の破壊であった。これはギデオンにとって厳しい試練であった。

主の使いは彼に言った、「あなたの父の若い雄牛、それも七歳の二番目の雄牛を取り、あなたの父が持っているバアルの祭壇を倒し、そのそばにある木立

ち（偶像礼拝に使われる神聖な木）を切り倒しなさい：そして、あなたの神、主に祭壇を、この岩の頂上の、定められた場所に築き、二頭目の雄牛を取り、あなたが切り倒した木立の木で、焼き尽くすいけにえをささげなさい。"士師記6:25,26

ギデオンはこの指示を実行した。彼は10人のしもべの助けを借りて、"主が彼に言われたとおりにした"。彼が夜に指示を実行したのは、父の一族の反応を恐れ、彼らがそれを発見する前に行為を完了させるのが最善だと考えたからである。ギデオンは、バアル（ ）崇拝者の激しい反応を過小評価しなかった。町の人々は、何が行われたのか、ギデオンに責任があることを知ると、彼に死ぬことを要求した。

彼らはギデオンの父ヨアシュにこの要求をした。しかし、ヨアシュは、息子が破壊したバアルの祭壇と木立を築いたにもかかわらず、ギデオンの命を要求する者たちにこう答えた。士師記6:31

ヨアシュは明らかに、バアルが自分の祭壇の破壊を防ぐことができなかったという事実に感銘を受けていた。賢明な彼の同情心はギデオンに傾き、イスラエルの神への信頼は増していた。「その日、ヨアシュは息子を「ジェルブバアル（ヘブル語：バアルに争わせよ）」と呼び、こう言った。

集結した軍勢

すぐに危機が訪れた。そのとき、ミディアン人、アマレク人、東方の子らはみな集まって、エズレルの谷に宿営した。しかし、主の霊がギデオンの上に臨まれた。彼はラッパを吹き鳴らし、彼の父の家来の者たちが彼のもとに集められた。また、使者をアシェルとゼブルンとナフタリに送った。**(33-35節)**。事態は急速に進展し、ギデオンはすぐに、イスラエルの敵を攻撃するために彼のリーダーシップに従おうとする軍隊に取り囲まれていることに気づいた。ギデオンにとって、父の家で最も小さい者とされていたこの出来事は、かなり圧倒的なものであったに違いない。

ギデオンは神に言った、「もし、あなたが言われたように、私の手によってイスラエルを救ってくださるなら、見よ、私は羊毛のフリースを床に置こう。もし、露がそのフリースにだけかかり、その周りの地がすべて乾いているなら、私は、あなたが言われたように、私の手によってイスラエルを救ってくださることを知るであろう」。**(36,37節)**。主はギデオンに忍耐強く接し、彼の願いを聞き入れた。翌朝、彼がそのフリースを見ると、記録にもあるように、「ボウル一杯の水」を含み、完全に濡れていた。

これで納得できるはずだったが、それでもギデオン。二重に確かめるために、彼は条件を逆転させ、二回目の試練で、フリースが乾いたままで、露が周囲の地面に落ちるように主に求めた。

ギデオンは、自分が大きなことを要求していることを悟り、神に言った。"あなたの怒りを私に対して熱くしないでください。主は再びギデオンの願いを尊重された。"ノミの上だけは乾いており、すべての地には露があった。"(39,40節)。ギデオンが生きた時代は、イスラエルの歴史の中で、国が偶像礼拝に傾き、何年もの間、敵に虐げられていた時代であった。彼は個人的な経験や観察に基づく主への信仰をほとんど何も持っていなかった。40年間ミデヤンにいたモーセのように、ギデオンもまた、自分が民を救い出すために召されていることを、さまざまな形で確信する必要があった。

このような自己確信の欠如があったからこそ、主はギデオンを見事に用いられたのである。しかし、主がギデオンに学ばせたかったもう一つの教訓があった。神はギデオンに、彼がガト（ ） 。"あなたとともにいる民は、わたしがミディアン人を彼らの手に渡すには多すぎる。"イスラエルが、わたしにむ

かって自らを誇示して、"わたしの手がわたしを救った"と言うことのないように。士師記7:2

ギデオンのもとに集まった義勇軍の当初の規模は3万2千人であった。主の指示の下、彼は部下たちに、恐れている者は自分の家に帰るように言った。「すると、民のうち二万二千人が帰り、一万人が残った。(3節)。主はギデオンに言われた。彼らを水のあるところまで連れて行きなさい。もしわたしが、『この者はあなたとともに行く』と言えば、彼は行くであろう。

テストは単純なものだった。犬が水をなめるように、舌で水をなめる者と、ひざまずいて飲む者とを分けなさい。"万人のうち、「手を口にあてて」水をなめる者は三百人しかいなかったのので、飲むのを注意深く見守ることができた。この三百人が、ギデオンが率いてミディアン人に対抗する全軍を構成することになった。

さらなる強化

イスラエルの敵の大軍がエズレルの谷に宿営していた。ギデオンは、そのような武力的な軍勢をたった三百人の兵で撃退することができるという、更なる保証を必要としていたに違いない。「その夜、主は

ギデオンに、そのしもべプラーを連れてミディアン人の陣営に行き、"彼らの言うことを聞きなさい"と指示された。主は、彼が聞いたことが、後に行われる攻撃への勇気を与えると告げられた。

このミディアン人の隊列への訪問は夜間に行われ、彼らの見張り番には気づかれなかった。「ギデオンが到着したのは、ちょうど一人の男が友人に夢を語っているときであった。私は夢を見た。丸い大麦のパンがミディアン人の陣営に落ちてきた。それはテントに勢いよくぶつかり、テントはひっくり返って倒れた。これはイスラエル人ヨアシュの子ギデオンの剣にほかなりません。神はミディアン人と全陣営を彼の手に渡されたのです」。(13,14節)。この夢の話とその解釈を聞いたギデオンは、神が自分の軍隊として選ばれた**300**人の小さな一団が、実際にミディアン人を打ち負かすことができるという確信を得た。主がミディアンの軍勢をあなたがたの手に渡されたからである」(15節)。

ギデオンの**300**人の兵士には武器が与えられていなかったが、彼は一人一人にラッパ、土製の水差し、水差しの中に入れるランプ(たいまつ)を与えた。人類の歴史上、このように装備を整えた軍隊が他にあったらどうか。記録にはそう記されていないが、

ギデオンの戦い方と攻撃計画が主の指示によるものであったことは疑う余地がない。ギデオンは兵に武器を持たせると、兵を**3**つのグループに分け、下の谷に陣取るミディアン人の軍勢を囲む丘の両側に配置した。ギデオンは、小部隊の一つについて。士師記 7:16

彼は皆に、自分のしたとおりにするように指示した。彼がラッパを吹いたら、彼らもラッパを吹くように。同時に、彼らは松明を隠すために使っていた投石器を壊さなければならなかった。そして、"主の剣、ギデオンの剣"と叫ぶのである。(17、18節)。先に仲間の夢を解釈したミディアン人は、"これはギデオンの剣以外にあり得ない"と言った。おそらくミディアン人の多くは、この夢とその解釈を聞いていただろう。だから、**300**の叫び声を聞いたとき、彼らはきっと夢が実現したと思っただろう。

ギデオンの戦略には、表面的に見える以上のものがあつたようだ。ギデオンの軍隊は小規模であつたが、事実上ミディアン人の陣営を取り囲むように配置された。通常、ラッパを鳴らし、松明を持っているのは軍の隊長だけである。ミディアン人が三百のラッパを鳴らし、三百の松明が明滅して四方を取り囲んでいるのを見れば、自分たちがとてつもない大軍に襲われているという印象を与えるに違いない。今

日では、このような戦略を "心理戦" と呼ぶかもしれない。

300人全員がラッパを吹き鳴らし、投石器を壊し、たいまつを掲げて「主の剣、ギデオンの剣」と叫ぶと、敵の隊列に恐怖とパニックが広がった。「主は、すべての者の剣をその仲間に向けられた。(19-22節)。ミディアン人が互いに攻撃し合うと、彼らは逃げ出した。イスラエル人は追いかけて、ついに彼らの王子や王たちを捕らえて殺した。(士師記7:23-25、8:1-21)。イスラエルの勝利は完全なものとなった。

ギデオンは、聖書の中で最も謙虚で、同時に最も優れた政治家の一人である。主の使いが初めて彼に語りかけたとき、彼は自分が父の家の中で最も小さい者であることを説明し、この謙遜の精神を保ち続けた。彼は、ミディアン人が "ギデオンの剣" という表現を使うのを聞いたが、自分の小さな軍隊にこれを戦いの叫びとして使うように指示したとき、彼は神の名を加え、"主の剣、ギデオンの剣" と最初につけた。

彼の勝利が終わると、"イスラエルの人々はギデオンに言った。"あなたも、あなたの子も、あなたの子の子も、私たちを治めてください。しかし、ここ

でもまた、ギデオンの謙遜と正しい視点が現れている。主があなたがたを治められるからです」（士師記8:22,23）。（主があなたがたを治められる」（士師記8:22,23）。このように、イスラエルのこの忠実な裁判官は、民の前に主を保ち、主に従うことによってのみ、民は自由と繁栄を保つことができることを強調したのである。

ギデオンの模範と忠実な裁きの結果は、彼が生きている間だけ続いた。「ギデオンが死ぬとすぐに、
・
・
・イスラエルの子らは再び立ち返り、バアリムの後を追って淫行し、バアルベリスを自分たちの神とした。イスラエルの子らは、四方の敵の手から彼らを救い出された彼らの神、主を思い起こさなかった：イスラエルの子らは、四方の敵の手から彼らを救い出した彼らの神、主を思い起こさなかった。士師記8:33-35

エフタとその娘

ギデオンの死とその息子アビメレクの悪行の後、主によってイスラエルの問題を指揮する一連の裁判官が起こされたが、ギレアドの子エフタに至るまで、彼らに関する情報はほとんど与えられていない。エフタは勇猛果敢な男として紹介されているが、「見知らぬ女」の子であったために兄弟たちから排斥さ

れ、「兄弟たちから逃げて、トブの地に住んだ」。
士師記11:1-3

エフタの指導者としての能力、軍事家としての能力は、自分たちが社会的に優れていると思っていた人々にも認められていたようだ。イスラエルがアモン人に圧迫されるようになった時、長老たちはエフタを探し出して助けを求め、アモン人を打ち破った後、国の指導者になることを約束した。エフタはしぶしぶそれを受け入れ、以前、主の祝福があったときに他の武将がそうであったように、勝利を収めた。

しかし、エフタの名が聖なる記録の中で際立っているのは、彼の軍事的専門知識のためではなく、神の助けによって彼に与えられる勝利を予期して、彼が主に立てた誓いのためである。その誓いとは、彼が戦いから帰ってきたとき、彼の家から最初に出てきたものはすべて、いけにえとして主にささげるというものであった。

エフタが戦いから戻ると、一人っ子の幼い娘が真っ先に家から出てきて彼を迎えた。エフタはその娘を見て、服を裂き、言った！あなたは私をすっかり滅ぼしてしまった！あなたは私に災いをもたらした！

私は主に誓いを立てたが、それを取り消すことはできない」 **34,35節**。

イスラエルの高貴な人々の間では、主の前で誓いを立てることは非常に重大なことだった。ソロモンは、「誓って払わないよりは、誓わない方がよい」と書いている。(伝道の書**5:4,5**)。エフタはこの視点を持っていた。彼の誓いは、彼が予想していたよりもはるかに、費用がかかることが判明したが、このような厳粛な義務を負ってしまった以上、それを変更する方法はなかった。彼の娘は反抗しなかった。彼女は状況を理解し、記録にあるように、"私は山々を上り下りし、私と私の仲間たちの処女を嘆き悲しむことができる"**2ヶ月間**だけを求めた。エフタはこの願いを受け入れた。二ヶ月の後、彼女は父のもとに帰り、父は誓いのとおりに彼女を身ごもった。士師記**11:36-39**

一般的には、エフタは実際に娘を生贄として捧げたと考えられている。実際、聖書の記述を何気なく読むと、そのような見方ができる。しかし、いくつかの聖書訳では、**40節**の表現は異なっている。その聖書は、イスラエルの娘たちが毎年「ギレアドのエフタの娘と一年に四日間話しに行った」と説明している。

これが "イスラエルの習慣 "になったと**39節**は説明している。エフタの娘は生きていたに違いない。そうでなければ、イスラエルの女たちは毎年彼女と話すことはできなかった。記録をより注意深く調べてみると、実際に起こったことは、**、**少女が生涯処女であり続けたことであることがわかる。イスラエル人から見れば、父親が少女に求めるのは途方もない犠牲であった。

この考えは記録からも明らかである。エフタが自分の立場を娘に説明し、彼女が二ヶ月の猶予を求めたとき、ある注釈者が説明するように、彼女は死に備えるためにこの二ヶ月を求めたのではなく、自分の処女性を嘆くために求めたのである。**(士師記11:37)**。彼女が帰ってきて、父親が "誓った誓いのとおりに彼女とした "とき、"彼女は人を知らなかった "と説明されている。エフタは"主の霊"に導かれた者であった。**(29節)**。モーセの律法で禁じられていたからである。申命記**12:29-31**

アモン人に勝利した後、エフタはイスラエル国内のエフライム人の反乱を鎮圧する必要があると考えた。彼らの反乱は、エフタがアモン人の征服に自分たちの助けを求めなかったと主張したことによるところが大きかった。彼らの主張は事実ではなく、エフ

タは彼らの反乱を見事に鎮圧した。エフタの生涯に関する記録は他に何もない。ただ、**、彼の士師としての任期は6年間続き、彼は死んだ。士師記12:1-7**

力あるサムソン

エフタの死後、他の数人の士師たちがイスラエルに仕えたが、記録には単に記されているだけである。次に注目される士師は、マノアの子サムソンである。彼は、以前にもあったように、"イスラエルの子らが主の目の前で再び悪を行なった"ために、裁判官として育てられた。その罰として、"主は彼らを**40**年間ペリシテ人の手に渡された"。士師記13:1

サムソンの母は不妊であったが、天使が現れ、彼女に男の子が生まれることを告げた。夫のマノアはその場にいなかったなので、まだ天使と認められていないこの訪問者を見ることができるよう祈った。天使との面会の間、マノアは岩の上に子供をいけにえとしてささげた。その時、彼らは天使の訪問を受けたことを知り、その天使はイスラエルにとって、彼らに生まれる子（ ）が非常に重要であることを印象づけた。その子は、天使が説明したように、「イスラエルをペリシテ人の手から救い出す」者となる。

主の指示に従い、サムソンの頭は幼い頃から剃られなかった。サムソンの両親は、彼が生涯ナザリ人となるよう指示されていたからである。民数記**6:1-21**に記されているように、ユダヤの律法の下では、ナザリ人とは、人々から切り離され、限られた期間、あるいは終生、主の奉仕に専心する者のことであった。ナザリ人の外見的特徴の一つは、髪を切っていないことであった。

サムソンはその力強さで知られている。しかし同時に、新約聖書の基準によれば、彼の個人的な生活は称賛されるべきものではない。それにもかかわらず、彼の心は神に忠実であったことは明らかであり、ヘブル人への手紙では、先に考察したギデオンやエフタと同様に、古代の信仰の英雄の一人として名前が挙げられている。ヘブル**11:32**

サムソンは結婚していたが、その後、ある女性と出会い、"その名をデリラといい、愛していた"（士師記**16:4**）。（士師記**16:4**）。彼女に迫られた後、彼はデリラに、自分の強さの秘密は髪にあると明かした（**15-17節**）。ここから、彼の髪から体へと力が流れる神秘的な方法があったとは考えられない。彼が神への献身の象徴である髪を保っている限り、彼

に関して記録されている力強い偉業を成し遂げる力が主から与えられたということであろう。

サムソンの髪に関する秘密を知ったデリラは、サムソンが眠っている間に、男に髪を切らせようとした。おそらく、サムソンがデリラとの交際で神に捧げる誓いを破っていなければ、主はこのようなことを許されなかっただろう。彼の髪がなくなったので、主は支援を取りやめ、ペリシテ人はサムソンを捕らえ、目を摘出し、牢獄に入れた。

サムソンは、主が与えてくださった力によって、長い間ペリシテ人を苦しめていたので、ペリシテ人は今、彼を支配下に置いているという事実を喜んだ。彼らは、真鍮の枷で彼を縛ることによって、彼が自分たちから逃げ出さないことを二重に確かめた。強大なサムソンに対するこの勝利を祝うために、ペリシテ人の領主たちは、彼らの神ダゴンにいけにえをささげるために集まった。

この集まりは彼らの異教の神殿で、大集会であった。「ペリシテ人の諸侯はみなそこにおり、屋根の上には三千人ほどの男女がいて、サムソンがスポーツをしている間、その様子を見ていた。(25-27節)。強大なサムソンにとって、なんという屈辱であろうか！

状況はすぐに変わった。サムソンの信仰が救いの手を差し伸べたのだ。彼の髪は再び伸び始め、彼はペリシテ人に復讐するために、もう一度自分を助けてくれるよう主に願った。その後のことはよく知られている。彼は、建物の屋根を支えていた二本の柱の間に身を横たえて、その柱を引き離した。こうして、彼が死ぬときに殺した死者は、彼が生前に殺した死者よりも多かった」。

ここでもまた、ペリシテ人の神殿を倒したのは、主から特別に与えられた力であったと考えなければならない。サムソンの力によるすべての功績は、エリコの城壁の破壊や紅海の裂け目と同じように奇跡であった。ただ、私たちの神がご自分の目的を達成するために用いる方法において、何ら制限されることがないということを説明するのに役立つということを除いては。

未来の審判

キリストとその忠実な従者である現代人は、将来の裁きの時に裁く者となる。(使徒17:31、1コリント6:2)。イスラエルが神の律法に従わなかったために敵の束縛を受けたように、現在、全世界は罪と死の束縛を受けている-ユダヤ人も異邦人も同様であ